

## 国連気候変動枠組条約（UNFCCC）リサーチダイアログでの 木本教授の発表について

6月7日（土）、ドイツ・ボンにて、UNFCCC 第40回補助機関会合（SB40）の一環として Research Dialogue（RD）<sup>1</sup>が開催され、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第五次評価報告書（AR5）の第一作業部会（WG1：自然科学的根拠）第11章の執筆者であり、気候変動リスク情報創生プログラムの領域テーマA代表者である東京大学大気海洋研究所の木本昌秀副所長・教授が、UNFCCCからの依頼を受け、専門家として、下記の点を含む、研究の最新動向について発表した。<sup>2</sup>

- ・ 地球システムモデルの開発
- ・ 近未来（半年～10年規模）予測と、ハイエイタス（近年の全球的な昇温鈍化傾向）の解明
- ・ 超解像度大気モデルを用いたダウンスケーリング実験（格子間隔：全球レベルで20km、地域レベルで2kmおよび5km）
- ・ 直近の過去を対象とした異常気候等の要因分析（Event Attribution）
- ・ 全球雲解像モデル（NICAM）の開発を通じた、雲の予測精度の向上と不確実性の低減

これに対して参加者からは、予測の不確実性の低減や、ハイエイタスの解明、高解像度のダウンスケーリング実験による途上国を含めた地域予測等に対する賞賛・期待の声が聞かれた。



また、木本教授の後に IPCC 事務局長が「AR5 が残した研究課題」について発表を行い、その例示の多くが、木本教授の発表内容と重複していたことも、参加者・発表者から、印象的であったとのコメントが寄せられた。

木本教授の発表の中でも特に超高解像度大気モデルを用いたダウンスケーリング実験への反響が大きかったが、IPCC 事務局長の発表でも同様に、下記の点をはじめとした地域（アジア地域や特定の都市等）レベルの研究・評価に対する政策的ニーズの高さが強調されていた。

- ・ 水循環等の個別のテーマに焦点を充てた、地域レベルのモデリング
- ・ 地域レベルの気候変動の原因特定
- ・ 地域別の脆弱性・暴露性
- ・ 地域レベルの研究者・研究機関のキャパシティ・ビルディング

また、SB40 会期中、IPCC の3分野（WG1、WG2（影響、適応、脆弱性）、WG3（気候変動の緩和））間の連携が AR5 では不十分だったと複数の国の交渉官が発言し、IPCC 事務局長の RD での発表でも、より包括的な3分野のモデルの成果の統合等、分野横断型の研究が今後の課題であると指摘があった。

以上

<sup>1</sup> 気候に関する研究や研究に関する人材育成について議論し、研究における新しい知見や教訓を伝えるための研究対話型のワークショップ。年に1回開催。今回は、UNFCCCに参加している各国の交渉官の他、IPCC関係者やその他発表者（主に研究者）等、約70名が参加。

<sup>2</sup> RDのPPT資料やビデオ画像は下記のUNFCCCのホームページに掲載されている：

[http://unfccc4.meta-fusion.com/kongresse/sb40/templ/play.php?id\\_kongresssession=8038&theme=unfccc](http://unfccc4.meta-fusion.com/kongresse/sb40/templ/play.php?id_kongresssession=8038&theme=unfccc)